

「浜通りの郡村誌・郡誌・郷土誌」

平成27年9月に「浜通りの記録をたどる資料展」を行い、そこで『磐城郡村誌』、『宇多郡村誌』、『石城郡誌』、相馬地方の『郷土誌』の一部を展示した。いずれも明治期の社会・経済の発展をうかがうことのできる貴重な史料となっている。

『磐城郡村誌』『宇多郡村誌』は、それぞれ明治政府の命によって福島県が編纂した皇国地誌の一つで、磐城郡は、現在のいわき市の一部で、四倉と小川および平の北部にあたり、宇多郡は、現在の相馬市・相馬郡新地町一带にあたる。

廃藩置県以後の約10年間、中央集権的な国家形成ために行われた数々の試みの中の一つに「皇国地誌」の編纂があった。

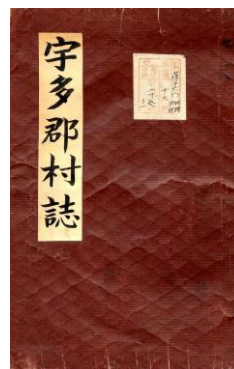
その目的は、新政府が各府県の現況を掌握することであったとされている。明治5年(1872)9月の太政官達(第290号)をもって各府県に編纂を指令し、明治8年(1875)6月5日の太政官達(第97号)において詳細な「皇国地誌編輯例則」が示された。町村名、疆域、幅員、管轄沿革等47項目にわたって調査し、絵図を添付して報告するように命じている。

編纂にあたっては数名の編纂掛が置かれ、明治12年(1869)改正6月改正の『福島県職員録』には、編纂担当者の名前が確認できる。『磐城郡村誌』『宇多郡村誌』は、大須賀次郎・川瀬教文らが御用編纂掛として編纂にあたった。

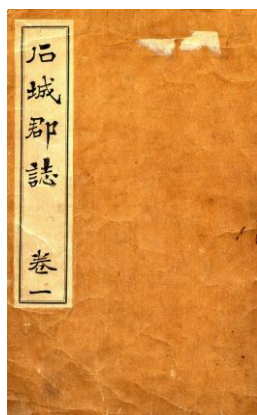
当館で所蔵している『磐城郡村誌』『宇多郡村誌』は、県側の控本で、正本は、大正12年(1923)の関東大震災により東京帝国大学図書館で焼失してしまった。柳田国男は「地名の研究」(『定本柳田国男集』第20巻所収)において「皇国地誌」の運命について触れ、その消失を嘆いている。



磐城郡村誌



宇多郡村誌



石城郡誌

時は流れ、明治44年(1911)。内務省の指示を受けて、福島県においては、大規模な郡誌・郡郷土誌の編纂が行われた。その背景には、社会主義思想への防壁として国民道徳教育の普及させるため、国史教育に郷土教育を持ち込もうとしたことがあるとされる。

福島県知事による訓令第34号をもって、郡誌・郡郷土誌の編纂要綱を提示、郡役所や郡教育界の編により多くの郡誌が刊行された。郡制が廃止されることも重なって、記念事業の意を兼ねていたようである。また、各小学校の校区ごとに、教員が中心になってその郷土の歴史や地理、信仰、習俗などを記録した郷土誌も作成された。

『石城郡誌』『郷土誌』がこの時期に作成された史料とされ、石城郡は現在のいわき市の大部分にあたる地域を指している。『郷土誌』は、現在の相馬地方で作成されたものの原本を所蔵している。

『磐城郡村誌』『宇多郡村誌』『石城郡誌』はすでにデジタル化が完了しており、『郷土誌』も現在デジタル化を進めている最中である。

<参考文献>

- ・『福島県史 第21巻』(1967年)
- ・『日本歴史地名大系 第7巻』(1993年)
〈地域資料チーム：神谷祥平〉